黒毛和種の Body condition score と発育値および審査得点との関係

池　田　博　文

（第37回西日本畜産学会講演要旨）1986．10．15．宮崎大学農学部

目　的：演者らは第36回の本大会で，鹿児島大学入来牧場における黒毛和種繁殖牛においては，分娩前の Body condition score（BCS）は 3^{+}で，分娩によって3に低下したものが，再び 3^{+}に回復する場合に受胎成績が向上することを報告した。また，鈴木らや中西らは育成期を低栄養にしても，繁殖機能や泌乳能力等の子牛生産性は損なわれず，連産が可能であることを明らかにしている。

一方，わが国の肉用牛は，ほとんど全てが登録牛であるため，飼育農家や技術者の審査得点に対する関心は高く，得点を目的にして過肥にし，飼養コストを増加させ，更に，その後の繁殖能力を低下させる例が多く見られる。

本研究では，登録審査時点でのBCSと発育値，減率および審査得点との関係を明らかにし，登録審査における選抜とその後の繁殖能力を低下させない適正な栄養水準を明らかにするための基礎資料を得ようとした。

方　法：鹿児島県の薩摩地区および鹿児島地区の13ヵ所の審査場において，318頭の繁殖牛について，BCS，体各部位の発育値，体各部位の減率，得点および種雄牛を調査した。

結　果：BCSが高いものほど体各部位の発育値は大きくなる傾向を示し，BCSと各部位の発育値との間で正の相関が認められた。その結果，BCSが高いものほど審査得点が高くなる傾向を示し，審査得点＝1.071BCS＋75.336（$r=0.51368$ $p<0.01$）の関係が認められた。しかしながら，登録審査における「栄養状態」はほとんど全てが3であり，審査得点に影響はなかった。

BCS，体各部位の発育値，体各部位の減率および審査得点は審査場によっても異なる傾向を示し，繁殖地帯ではBCSや審査得点が高くなる傾向を示したのに対し，肥育地帯ではBCSや審査得点が低くなる傾向を示した。また，BCS，体各部位の発育値，体各部位の減率および審査得点は種雄牛によっても異なる傾向を示し，審査得点は第20平茂が高く，金水九や田安森永は低い値を示した。